通客必用

筭法珎書

完

電気通信大学附属図書館

太平民

喚門招福

樂地忘憂

電気通信大学附属図書館

狸は太平の御代を祝して
腹を鼓にうめでたき例の
獣なれば祝ずみざんの古
きを改めてたぬき算
の新法をしるす

八月つごもりに
たぬき一疋出てきた
を三つとく
二日よりぬき二疋出て

きたを三つづゝとくぬき
二ひきづみ六こゑなり
三日よりぬき四疋きたづみ
十二こゑ　四月八日ぬき八疋
五月十六疋　六月十三疋
かくのごとくまのあたりぬきの数
だんだんまして　きたをとくこゑ
きくナハ夜よりとくぬき
何疋づみとくこゑと問ふ
答　ぬき一万六千三百八十四疋
きたづみ四万九千百五十二声

電気通信大学附属図書館

あづまをかける籌の事

タイコモチ　あづまをもけるさんハぢんうき
るのくさようひろまりまして
ひさりつるあかしくみり
まして　やまさくぶん
いまして　あづま
かけるさんとあり
しあるしくん
すふまちぐみちの
しゆのうぐで
ムリ木

東の京吉原の
廓よりぐいしや
百廿人　格ぎ
よ　九十六人　深川よ　三十
八人　堀よ　廿四人　芝ぐ

よ　七十二人　下谷よ　十
八人　そのほかあしよ　百
八十人　ありぐく　五百四
十八人　あり　ぬげいし
金二分の花をくれる
客よハ　一分ぐけのあづまをうけ
二分の花よハ　二分ぐけの他をかける
一ケ年　三百六十日まいにち　一人よ　身金　ちぢあづ
とけもりて　一ケ年のあづまの高を問

電気通信大学附属図書館

但し 格上油一斗代銭廿文　合壱貫八百十文

答　一ヶ年分　合十九万七千二百八十文

作者いちくのあづをうけられもむすこハみち
あやぢまーぎりこちらこなりつーしむべし

かるすぎんの子　男女きせう文をかくよ

いつもりのせいもんちれで結果まて
かるん三ねゝ死ぬといふ今かるん
三万三千三百三十三ねゝ死ぬきせう文
の数何のまいと間　答　一万千百拾壱枚

筭法珎書序品第一

如是我聞、一時寐釋迦如来、在借錢
檀上、為銅鑼伽如来、分半座以説法、
時諸天大衆、来會十萬八千、有洒落
哉尊者者、偏袒右肩、頂禮佛足、而白
佛言、吾在洒落國中、新説妙法、國中
人民、莫不歡喜、所以者何、是法能通、
十方三世、過去未来、現世無量劫、無

電気通信大学附属図書館

謬錯故、譬如世尊、在此借錢檀上、出廣長舌、與無量恒河沙阿僧祇債鬼論議、有人以尺、量世尊舌、不能測知、測知是者、唯吾妙法、東方有三千大千世界、須弥銕圍、諸山圍繞、吾以是世界磨墨、轉向西方、行百千萬億恒河沙由旬、方下一滴、又行百千萬億恒河沙由旬、更下一滴、如是漸漸西向、滴墨既盡、即立是地、仰望世尊之廣長舌、尚未測其尖端所至、大衆謂何、世尊之舌、如是廣長、豈尋常債鬼所敢能窺、如来即時、現圓滿相、拈華微笑、稱讃尊者、善哉善哉、真善男子、吾廣長舌、無人能測、唯汝悟得、吾應以過去無量劫、教主世尊、所傳妙法、悉付囑汝、自今以後、百千萬億、那由

電気通信大学附属図書館

他阿僧祇劫後、汝當得正覺、號頓作
如来、出廣長舌、化度羣生、此滿座大
衆、皆當拜汝、為大師父、爾時諸天大
衆、異口同音、歡喜讃歎、信受奉行、

武昌　喫霞仙人翻譯

日脚みじかの記十二月。ことし日はやく暮
春の。板えのふ言。出林の催促。はいなく
ちる。世はつきる。暮極風月の債。十日の内ふ
ゆ。ゆくとしの。昨が。ゆめとゆめ。屋ごの。係こ
ゆふ。ゆめ。名思案のお未合茅稿。昔を
記わりー。ちゐ。中。酒屋高。郵。紙として
きゝり。一ふ冊を几ちに掛ち。サア京庵我

書ケとの格栖づく。表紙をんまば。美法
弥出。何れかの知恵拙ども。ちゆり店の中
お出ゞ。初刷るゞ一と心づき。潤まい所とう
ゞ。句 草稿ひきこのく喜る詰る。句 サア共
生をどふする。句 おきるも出きぬゞ。年高れ
年一ぢもすぐふ。序文を書て一雲り
ゝ。句 ちいつい甘い心ちきう。暫くまゝせ。

草稿の時せ川 年ゆくぢくもよりゞと。
狗〻奥様ちひこはの世。を使をきつけて。
序文まぎれ信ゝ。本屋の小僧ゞさ
ぬ口。先生この本は何を書く出すれと。問
れてすぐ一きまりゞ。そふ遠者ふぬのぬ
新付。序をのそれゞのお出の役。本の事なら
此者ふまけと。にゝみ何れば。小僧ハクく

笑ひぐさ。ゆつてをマダ眼ゝ学べぬと思くるナ。

戊辰十二月十九日のいるめ　ゆめや柳麿志るす

算法玉書序

我友洒落斎滝戯を尽せるの絵略。以一巻をあつらへ。嘱斎先生醉のまぎれよ校閲きれて。速よ成よ及ぶ。そも算術は奥儀といふ。志すもの腮のかけ奇をさげし。ゆきぎし筆分を開うもる。そ術よ回。算者一組をのけく川縦の三を引くときさ。行のむはしきことふれば。

これらの踊の員利はうるさく。ちと勘定の面倒あり。山書をあんでも綴いらぬよ。
筆替を教ける奇方妙術。これぞ幻術二
一極作。実は早急は一のもうう。看客は
腹よ入れ子算。算盤の隅々すみを法
評判。新しを板えは勘定ば。ひとつよ
高論をまんといふよ。減よ引うまね格
式は仲間。早開は梅主

通客必用算法珎書初編

喫霞樓仙客閲　　洒落齋唐人著

鼓腹庵狸友校

一蕎麦八厘中して鞋を買ふ。一足廿文
あり。かさあり。を七文よまけよといふ。
のこりは片あり代いくほどと問
答片足の代十三文

一菱想を虧少年より六十五里を経て色欲より行り。又十八里ゆきて強飯より行り。又十七里ゆきて貪婪より美に。少年より貪婪までの路程を問

答　百四十里

一梅川大坂をうちのくとき金四十五あり。去るゆく廿一日の夜。三十九文二分つかひて二分のこる。一日より平均して入用何程と問

答　一日の入用金壱分と永二百廿八文ずつ七厘

一遠戸大神まいるとき三度で屁を垂る。九年の間屁のいう程と問

但一年三百六十四日。九年の間月四度あり。その日数百十六日なり

答 屁のかず九千九百〇六

一 鬼子母神に千人の子あり。柘榴を好みて毎日ちぎって食ふ。但し千人の内一人釈迦如来の鉄鉢にかくされたり。此時鬼子母神ちのなみだをながし。昼夜すがなみだといふ六子のことなり。のこりの子共一日にざくろいくつを食ふや

答 ざくろ五千九百九十口

一 張飛長坂橋のかしらにて。十万の兵を一度ににらみつけるに。十万人の肝ことごとくつぶれて芋になりしよし。但し曹操の肝は一斗八升のいもとなり。許褚がきもは八升七合五夕の芋となる。その外九万九千九百九十八人の肝も。みなちいさきゆゑ。一ツの肝はづかに一合五夕でのいもとなる。これをあはせていもは何石何斗になるやと問

答　百五十。石叱牛六升四合多

一　仮沼縁多の下僕筆助。名松山より

大坂まで八里の所を一走りに行きたり。

今名松より桑名まで二百里とす。此

間にて八幾走りと云

答　二十七走りなり

一　西方浄土の阿弥陀如来。四十八願を具

へ給ふ。此願ごとに十二の光明あり。名

づけて无量光。无碍光。无對光。焔王光。

清浄光。歓喜光。智恵光。不断光。難思

光。無称光。超日月光。照塵世光といふ。

此光明おのゝ四十八すぢよりわれて世界

を照し給ふ。その光明の中に。過去

未来現在の三千仏。菩薩よりなみ

観音勢至の二尊仏身のすがたを現

じ給ふ。仏身の仏の教いう極楽

答　十七万四千五百廿八体

一ある学者。和漢天竺。いぎりすの。五ケ国の字。ひらがなを知らざるなり。先日中のかぞへ。唐の文字ハ数八万四千。天竺の梵字四十八。イギリスの字廿六。オロシヤの字ハ三十六ありといふ。これを一字千金でよせもして。金を何程とる

答　八千四百十五万七千両

一ある娼妓のもてなしをきくに。日ごとあるひとの数を尋ねしに。家の数を毎日ヨ平均しに。二人づつとまるときハ廿五人あまり。三人づつとまるときハ五人不足をといふ。まるときハ家のうぢをあらびる日ごとにいくほどと問

答　日数三十日　実八十五人

電気通信大学附属図書館

一龍宮の乙姫誕生のいとひよ。亀と猩々と正覚坊とよ酒をのまるることあり。

よ。さうづきの数をしらず。酒の代数二十七石四斗なり。ゆゑに正覚坊ハ猩々よりも七石六斗多し。せうぐハ亀よりも五石七斗多しとよ。よりて各のはみる代数をとふ

答　亀　二石八斗

猩々　八石五斗

正覚坊　十六石一斗

一掘原源太。さうおもぐりのよろひを買物よしく。一ヶ年の間に元利ありて三百文となる。内に曰かはりゆゑに二割の利ゆゑ元金のうをとふ

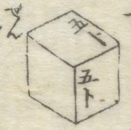
答　元金二百五十文

利金五十文

電気通信大学附属図書館

一梁山泊の魯智深。いまだ出家せざる前。酒屋の店よりゆきて十斤の肉を買うんという。その時中六寸巾一尺二寸あるの牛肉あり。これをみか六面の采の目よりきりて。采の目の数何程ぞと

答



の数二千三百〇四ツ

一蒙氣行よハ何馬力というもあり。弓のつよさをはかるよハ何鬼力という。これを

紙西八郎為朝よりそ。まる為朝世人法の弓をひくこと揚弓をひくごとし。紙をも腕の筋を切られてより八十鬼力減じるよ。十人法の弓をひくこと障るという。もれど元来為朝は弓場ハ何の鬼力よあるや

答　三百世鬼力

一頼兼彩良弓尾を分らけせんという。

電気通信大学附属図書館

亡八のいろく。元尾を天秤の片方にのせ、その目方に叶ふほどの小判をもそろへ。元尾を釣せ出し。こゝにおいて天秤をいろく小判と目方をかけくらべ。元尾の身体を見るに十三ノ六百目なれど。衣服その外いろくの目方を加へ十六ノ目あり。これにあらぬ小判の数を問ふ。作ー　菱長小判目方四匁八ト。今の小判にて武方五　作者曰。しんぶんしてハやはりのそろ。

一嵯峨の釈迦と浅草の観音と角力を取ましよ。惣数四十貫のうち。釈迦の勝六ト

答　菱長小判なれバ三千三百三十三ト

永三百三十三文三ト

今の小判にて武方五

のこれくらいなるべ

の小判くの目方八ト

電気通信大学附属図書館

答　歌迹のうち廿四番

観音の勝十六番

一　弥次郎兵衛　喜多八。伊勢の古市より
て。遠栗屋与太九郎と共に女郎を買ふ。
一夜の勘定銭百四十四文なり。これを二
つにして弥次郎兵衛二人前四十与太
九郎一人前四十すべき所なるに。与太九
郎銭四文ばかりとりて。二人の出銭

行徳と問

答　弥次郎兵衛　九十四文半

与太九郎　五十文半

一　金太郎　足柄山にて天狗と熊と戦ふ
くまたぶ。時に母山姥その友達を救ふ
る。頭七十七。足二百四十四あり。天狗
と熊の数を問ふ。但し熊ハ四足。天狗ハ
二足なり

電気通信大学附属図書館

答　天狗三十二　然は十五

一　平相國清盛公。扇をあげて三度招の事。西へ傾きしる夕日。半時ばかりの間とゝまれとゝ。扇の一まゝ引きを時刻よりていくばと問

答　一まゝ引き九二十三ニウト

作　日本一時を西洋の二時よりあり。半時を西洋の一時よりあるゝ。これを六十三ニウトよりわるゝと

一　蜘蛛の糸長さ一筋三千五百丈よりて。目方五百丈ばかりあり。源頼光四天王を命じて土蜘蛛の巣を取寄らるゝ。目方三貫六百目あり。巣を長く引のべて。糸の長さいくばと問

答　九千七百廿万丈

里数にして七万五千里

一　安房丹吉地獄より。地蔵堂より

電気通信大学附属図書館

借家住居しく。毎夜幽霊よりでる。人よりの
まれく日よりちん　一夜の八朔。焼酎弐久。樟
をとりて出るなり
脳目方五匁。流黄一匁なり。一ヶ年三百
六十日よ。はえを八朔行ずと問
作　丹去の時代を法色下歩して。せうちう
一外代八匁五匁。せうなり一斤代五匁六匁。
硫黄一斤代弐匁五匁。一斤を百六十匁。
答　訳六十八匁。はぶ

一ある寺のお僧きそめて愚鈍なり。和尚
毎日経を教るよ。僅二くぶりおぼゆる
よ。茶のところを忘ること平均廿字程
なり。これを差引勘定するに。一ヶ年の
覚よ何の字おぼゆるかと問
作　経の字数を。一くぶり十七字なり
答　わすれる字を引き。おぼえる字を
数五十。廿十字　ふるめしくも作者いく。
るのくとひよおろくるるおぼ

電気通信大学附属図書館

さんは。一年まハ五千あまりの字をおぼゆるなり。
これをひるんまーしゆつぜんの功なり。さきれどれ
ども おそりなくがくりんきれど。すこをを大学
をもとゝゝとゝゝびなり。
なんとゝゝどもしゆがてんの〳〵
一 ある家に息男 越不へ去きりまかよひ久る
ゝ。その友達これを知りて異見をなるゝ
油を取ゝゝ事日のあひだなり。此あぶら
は自方一ミニウトは五銭にて出るとい。油
一升の自方四百五十銭をつりて。事日は出

るあぶらの升数を問ふ 作 事日を西洋の
十ミニウトなり。これをちぐらをやりの 六時を六
ゝりとゝ時刻にて時刻をなる
答 油四升
一 今金汁行あり。一被の銭は糞汁四十
二荷を入るゝつりて五被の銭はハ何
荷入るゝやと問ふ
答 二百十五荷
一 大のゝこ一荷を廿七人の尻より出ゝる

電気通信大学附属図書館

ものをいふ。されど二百五十石を行人の尻より出せり

答　尻の数五千八百。五人

右二ケ条を菖西老農の俗補なり

一　丹次郎中の人口在り。男女米八一ケ月に金弐分弐朱を仕送り。仇吉を一日に金壱朱を送る。このうち小梅北お由に毎月壱朱時々壱両金を毎月

月々けいこ事に遣ひ。梅吉に毎月壱分。お蝶の母に毎月の小づかひ弐分を引て。丹次郎の手元入用に使ふなり

答　一ケ月弐百弐分弐朱

一　ある家に兄弟あり。兄を吉右衛門と云。弟を藤次郎と云。兄人に向ひて花見に行るゝ。弟の藤次郎は屋敷にて桜川善孝

よ逢ひく兄と別まつり。さりながら山白
も腐の命も嚢中乏しきゆゑ。よほど
倹約して。その日の入用を勘計する。
山谷堀までの駕かきなん。武兵衛
祝儀。梅吉。藝者二人。これぞ
まことの花ごよみ。茶屋にて。
川くしもとして一杯。新中へ入る酒と
一所に動定しく。梅川の下女

よ。向島にて桜餅を買ひ。堀
うち上陸しく仲の町の桜を見物し。
茶屋にて一口。その拝ひ。ひぐの四郎武兵衛
来。和よ見ぐいたつ花武兵。仲ひ拝ひ
のかなり。義孝しく武百足。郎りも
義代きかに来。こぐれもく祝儀武兵
つきに。梅又兄吾吉の入用を問つる土
手ちく固ろの代三十二文。みぐり稲荷の

電気通信大学附属図書館

へ賽銭四文。甘酒一杯三十二文。もちより
も食よ。銭ハ施さねども。女大夫はきまん
ちゃうのわく。四文おもそばちゃうや。
彼もちゃうち宝船ちゃうれる。一杯のみ
ちく成れども。茶屋へ上るハ費なりとて。
土手の伝ちく人をきをうぐひ。白馬
二杯引うけども。代名主ハ上りく百文
なり。芋でんぐく武年。これが十六文浅草

観音へ参詣しく賽銭四文。子供へ
みやげ雷おこし四十八文。帰りハ空腹よ
へうのわく蕎麦を食へ代代百三十二文
なり。こちおいく五人の乃用ノ入る。ちゃ
びるその比例を問 但食事五月 十銭要文
答 答吉乃用 三百七十二文
蕩四郎乃用 金拾三匁四厘
比例を三百七十二分の一とあるる

一今銭四文まて万金丹を粧を買ふ。四文と万金丹の比例を問ふ　答　比例　二億八千八百万分の一

一昔色と食と礼といづれの重きと尋ねられしことあり。今その自方を考へ見るに。礼を京折の扇弐本。自方五分。相比金八匁。つきすくも〳〵拾六匁五分。これを十七匁とせる。食ハ一人前米八合飯よりきく七百廿匁。魚肉野菜二百六十匁。塩酢湯茶は自方およそ二百匁。酒一升の自方四百六十匁なり。扨色は東隣の娘の袖を引き試るに。此娘く年もやく色く十四ばかりにて。くく兼合なれども小娘なれども八歩九厘匁あり。依て色と食と礼との重さの差分を問

答　食て礼より重きこと六百廿二匁

色を食より重きこと七斗弐百六十文

一伯夷叔齊首陽山のわらびを食ひ尽しこと。周の國の米ハ買ふと心よろこばして。朝鮮の義子が店へ蕨を買ひにつかしこと。彼ハ山岩わらび拂底なりて。人参を まぜて送りたり。仍てわらび壱把の代く米壱合弐夕あり。米壱石を拾三斗弐百文あり。人参壱把を拾十六文ハ

ある今わらび三千五百把ハあるべしの人参の数を問ふ。仍て解答ハ調戯なり

答　人参八百四十把

一ある時仙人あり。壽命をたべ此世をなし。西王母の庭ハ桃の木ハ十一年ごとに。その実の数ハ八千五百あり。東方朔を只三つ食ひて九千年の齢を保つ。

り八千五百を一人ろく食ひ、ちゝはの方年ぜるやと問ふ

答　二千五百五十万年

作者ゝ、この外おりろき算術は珍敷あれども。板元は僅きゝ。算数限あるべし。裏命ゝ、べは一段ろくめでもく算を問くと云ふ

喫霞楼仙客大人閲

算法珍書　初編出来　古今は東西よりてめづらしき数をあげ、二編近刻　術をおぼゆる奇代の算法なり

同大人著

西洋将棋指南　箱入駒共　出来　形まねておこるべき将棋ひらげて其二つ三つ珍きはなりあるを出す

同

西洋開運物語　近刻　西洋古人は傳記を以方はこゝろぐるやすらげく児女教育よりはなき面入れまみ

東京　本町四丁目　中外堂上州屋摠七

中橋下槙町　寶集堂大和屋喜兵衛

三都諸國書林地本画双紙屋へ取次差出し申ハ

電気通信大学附属図書館

和新小學校教員

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

電気通信大学附属図書館